連載

精神障害者から見た人々

Vol.4

広田和子　精神医療サバイバー&保健福祉コンシューマー

大阪市 新聞記者 千葉光宏さん（43歳）

「自分の記事で広田さんの人生が悪い方向に変わるかもしれないと思い、常にまして慎重になった」と千葉ちゃんは後日しみじみ言った。

出会いは94〈平6〉年秋で、自己紹介程度のあいさつだけ。二度目は神奈川県の患者会のAさんから「広田さん！朝日の記者が全家連で俺たちの話を聞きたいと言っているので一緒に行こう」と言われ、行ってみると千葉ちゃんたちがいた。

同席者は東京の患者会仲間や当時、全家連資料情報室長の桶谷さんで、Aさんと私が席につくと、千葉ちゃんが「実は青物横丁事件*を受けて、精神障害者の報道をどうしたらいいのか？みなさんの生の声を伺い、取材したいと思っています」と言った。

私は、「90〈平2〉年に東京新聞に…バンド活動で記事が出たらA子さんとなり、後日、記者から記事より長い手紙が来て、〝本人が実名でいいといっても新聞社の都合で匿名にするし、匿名にしてほしいといわれても新聞社の都合で実名になる…力不足で…〟と書いてあった。マスコミが精神障害者を匿名で扱うのは、本人の人権を守るというより、実はマスコミの精神障害者に対する偏見でしょ！」と言った。

その後、マスコミの入通院歴報道について意見発表したときに、千葉ちゃんの姿があって、95〈平7〉年に入ると取材を申し込まれた。千葉ちゃんがかつて精神病院のことを取材した経験があり、インタビュー記事なので原稿をチェックできることを知り、取材を受けることにした。「顔写真と診断名も出したい」という千葉ちゃんの希望も了解した。

2月13日に「明日の朝刊に載ります」と原稿がFAXで届き、私一人の記事になったことを知った。

翌日の朝刊を見て、私は激怒した。確かに〝病歴を書かないで〟というタイトルが示す通り、私の主張が記事になっていたが、私が知らなかった囲みのメモが3か所あった。

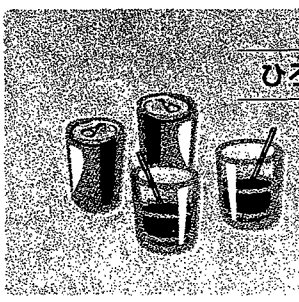
その1か所に94〈平6〉年版犯罪白書を引用し、「…罪名別では、精神障害者以外に比べて放火や殺人の比率が高い。…」と出ていた。これはまったく私の予期せぬ出来事で、千葉ちゃんに電話で「私は命がけで出たのに、何であれを出したの」と怒った。

千葉ちゃんは「偏見の背景には、精神障害者の放火や殺人が多いという事実があり、そのことはきちんと示した上で読者に再考を促すべきだと思って出した」と答え、後日手紙で、「…広田さんに指摘されて、あらためてよくよく考えましたが、考えは変わらない」と書いてあった。あくまで病歴報道が偏見を生むと主張する私と千葉ちゃんの考えは今でも平行線のままだが、二人の信頼関係にもとづく交流は続いてきた。

一昨年の池田小事件が起きて大問題の心神喪失者等医療観察法ができようとしている今、精神障害者による殺人の被害者の多くは家族で、放火は自殺未遂による自宅への放火であるという実態をあのときに突き止めていれば…と思う。

病歴報道については、千葉記者による私のインタビュー記事の後、社会部長が見解を書き、朝日新聞は病歴報道をやめることになった。

*東京都内の青物横丁駅で94年10月25日朝に医師がトカレフで射殺された。容疑者に精神科の入院歴があったことで、時間経過と共に報道機関により匿名、実名と分かれた。朝日新聞は指名手配時は匿名で、警視庁が公開手配に踏み切った時から実名を通した。匿名→実名→匿名と変えた新聞社やずっと匿名のところもあった。



ひろた かすこ

かつて私は主治医に〝文章を書くのが好き〟と語っていたところ、
それが病状としてとらえられていた時代もあった。
インフォームドコンセントのない医療ミスによる注射の副作用で廃人のようになり、
鍵と鉄格子のある閉鎖病棟へ緊急入院した体験もある。
現在も毎日11錠の向精神薬をのまないと眠れず、のんでも音がすれば眠れないので、
横浜市精神障害者住み替え住宅制度を使って山の麓の一軒家に住んでいる。
長年、日々の活動を通して出会った人々のことを書くのが夢だった。